

第1章 南阿蘇村の概要

1 自然的・地理的環境

(1) 位置・自然

南阿蘇村は、平成17年(2005年)に白水村、久木野村、長陽村の3村が合併し誕生した村で、阿蘇カルデラ南部の南郷谷と呼ばれる地域の西半を占めます。村の中央を東から西へ流れる白川を中心に、両岸の河岸段丘を棚田及び段々畑、その南北を居住地として利用しており、展望性のある田園風景を形成しています。村の総面積は137.30km²であり、標高600m以上の場所は大部分が山林、原野です。阿蘇の草は、1,000年以上にわたり、放牧や耕作地へ堆肥を供給する場などとして継続的に利用されており、現在も生活と深く関わり合いながら、輪地切りや野焼きを行うことによって維持されています。

さらに、白川水源や竹崎水源など多数の水源があり、今なお生活用水として使用されているほか、村の西側の立野火口瀬近くでは白川が阿蘇谷を北から流れてくる黒川と合流し、熊本平野へと流れているなど、「水の生まれる郷」としても知られています。



図1-1 南阿蘇村の位置

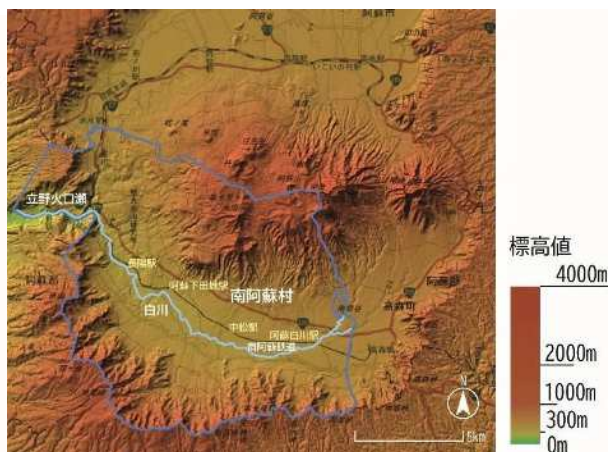


図1-2 南阿蘇村の標高(国土地理院電子国土Web)

(2) 気候

南阿蘇村の気候は山地型気候区に属し、特に降水量が多い地域で、寒暖の差が大きく比較的冷涼で過ごしやすい気候です。気象庁の気象データに基づく平成27年(2015年)～令和4年(2022年)までの平均値を見ると、平均気温値は14.5℃、平均降水量は236.1mmとなっています。

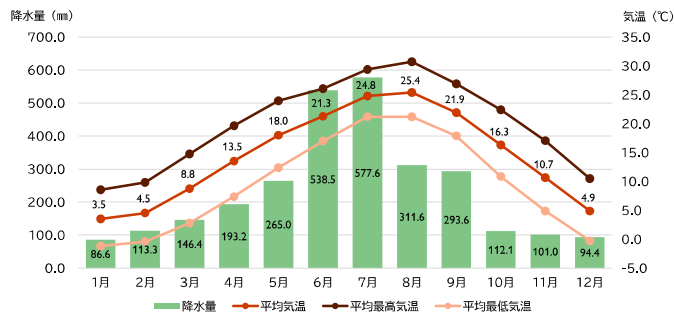


図1-3 南阿蘇村の気温・降水量の年間推移(2015-2022平均値)

(3) 地形・地質

南郷谷は、阿蘇谷と同じくかつて湖だった場所が立野火口瀬の決壊により湖水が干上がって形成された谷地であると考えられており、谷底の河床勾配が阿蘇谷より大きく、河川による山腹や谷底の浸食が進んでいます。北側にある中央火口丘群の山腹と南側にある外輪山斜面の間隔が阿蘇谷に比べ狭く、白川の流れによって谷が削られ段丘を形成していることが特徴です。

また、南郷谷を形成しているのは大部分が新生代の地層で、中央火口丘群部（玄武岩、溶岩・火砕岩、デイサイト・流紋岩）、カルデラ内の平地部（火山岩・火山麓扇状地堆積物）、外輪山部（安山岩、玄武岩質安山岩、溶岩・火砕岩）の3つに大きく分けられます。阿蘇谷に比べ火山灰、火山礫などの火山性の土砂の堆積は少なく、村の東側には火山灰、溶岩、土石流などの厚い堆積層からなる乏水性の台地が発達しています。

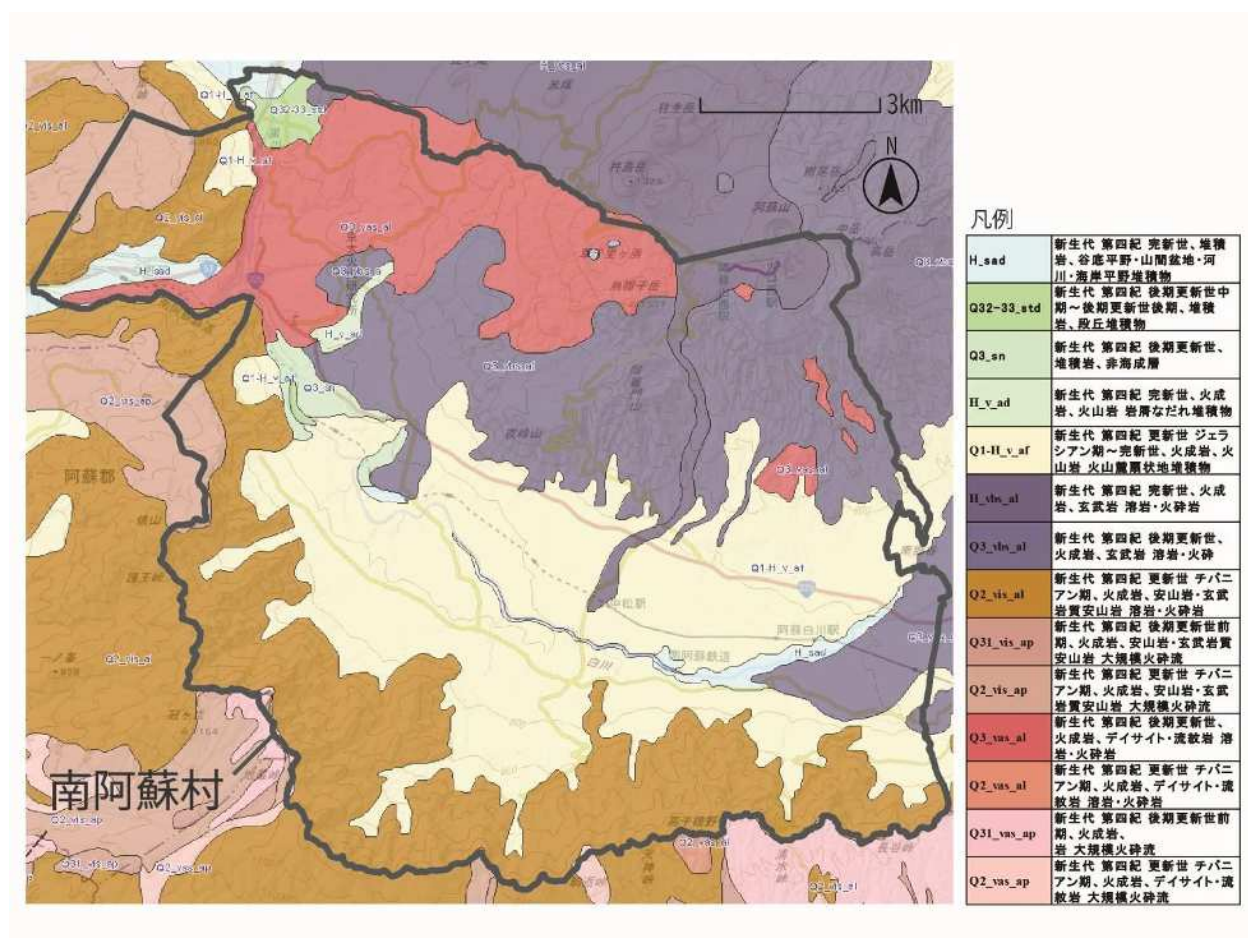


図 1-4 南阿蘇村の地質（出展：20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2 を加工して掲載）

(4) 植生

阿蘇地域に分布する植物は約 1,600 種と言われ、特に、草原には 600 種以上の植物が生育しています。大陸系遺存植物のノヤナギやキスミレ、湿地に生息するオグラセンノウやヒゴシオンなどの希少な植物が自生しています。中央火口丘群側の山頂から下方へ植生の変化を見ると、植生が未発達な火山荒原に始まり、ミヤマキリシマの群落、低木林へと変わり、標高 800m 付近から下部に草原、その下部 600m 付近には人工林、500m 付近から農耕地と移り変わっています。外輪山側では、約 1,000m の頂上から、広葉樹林、草原、人工林、農耕地へと順次移り変わっており、外輪山頂上付近にはナラ、カシ、ケヤキ、ヤマザクラ等の原生林が残されています。

(5) 自然災害

1) 水害

昭和 28 年(1953 年)6 月の 6.26 大水害や、平成 24(2012 年)年 7 月の九州北部豪雨など、南阿蘇村では過去に大規模な水害が何度も発生しており、人的被害、物的被害など、土石流等により甚大な被害を受けています。地球環境の変化によって今後もこのような水害が発生する可能性があり、文化財への影響や対策について事前に考えておく必要があります。

2) 地震

平成 28 年(2016 年)4 月、2 度の震度 6 強以上という大きな地震が南阿蘇村を襲い、甚大な被害が発生しました。近年、地震の影響で被災した未指定文化財に対するの修理の相談が増加しており、村と地域が協力して文化財を守る体制が必要となってきました。また、阿蘇大橋の橋げたや旧東海大学阿蘇キャンパスなど、地震の痕跡を後世に伝える各地の震災遺構を保存・活用するため、熊本県が令和 5 年(2023 年)7 月に熊本地震震災ミュージアム KIOKU を開館し防災教育の拠点となっています。

表 1-1 熊本地震人的被害数(令和元年 12 月時点)

死亡者	31 名(関連死 15 名含む)
重傷者	31 名
軽傷者	120 名

表 1-2 熊本地震建物被害数(令和 3 年 1 月時点)

全壊	699 世帯
半壊	989 世帯
一部損壊	1,173 世帯

表 1-3 熊本地震文化財被害数(令和 5 年 7 月時点)

長陽地区	32 件
白水地区	16 件
久木野地区	14 件

表 1-4 熊本地震被害(その他)

(出典：南阿蘇村復興むらづくり計画)

ライフライン	村内全体で停電発生、最大 3,761 世帯(約 80%)で断水発生
交通インフラ	JR 豊肥本線・南阿蘇鉄道の不通 主要道路(国道 57 号線・阿蘇大橋、長陽大橋、依山トンネル等)の寸断
農業被害	農地の地割れ、農業用水路の被災、人手不足の悪化
観光被害	アクセス悪化、施設被災、風評による観光客激減
その他	山腹崩壊及びその後の豪雨による土砂崩れ多数

2 社会的状況

(1) 人口

南阿蘇村の人口は、令和7年3月現在、総人口10,023人で、男性4,897人、女性5,126人、世帯数4,837世帯です。人口は昭和60年(1985年)がピークで13,285人でしたが、その後緩やかに減少しています。少子高齢化も進んでおり、昭和55年(1980年)には0～14歳までの人口は2,516人、65歳以上は1,770人だったのに対し、平成2年(1990年)から0～14歳の人口を65歳以上の人口が上回り、令和2年(2020年)には0～14歳の人口は1,005人、65歳以上の人口は4,201人となっています。令和7年(2025年)以降の村人口推計値については、令和12年(2030年)には1万人を下回り9,931人となり、令和27年(2045年)には8,222人になると推計されています。

また、過去10年間の人口の増減を見ると、社会増減(転出数、転入数)は減少傾向にあり、平成25年(2013年)以降は転入数を転出数が上回っていますが、近年では差が小さくなっています。自然増減(出生数、死亡数)を見ると出生数が減少傾向にあるのに対し、死亡数が増加しています。今後さらに少子高齢化が進むことが予想されることから、文化財の保存・活用、継承においても、少なからず実質的な影響を被ることが懸念されます。



(単位:人)

	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年
0～14歳	2,516	2,479	2,214	1,959	1,584	1,382	1,293	1,222	1,005	1,072	987	916	877	844
15～64歳	8,724	8,791	8,205	8,162	7,639	7,301	6,996	6,274	4,551	4,998	4,588	4,353	3,928	3,577
65歳以上	1,770	2,015	2,224	2,743	3,213	3,571	3,664	4,007	4,201	4,425	4,356	4,148	4,031	3,801
総人口数	13,010	13,285	12,643	12,864	12,436	12,254	11,972	11,503	9,836	10,495	9,931	9,417	8,836	8,222

図1-5 南阿蘇村の人口と将来推計

(出典: 国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」)

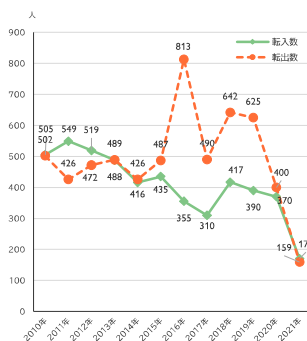


図1-6 転出数・転入数の推移

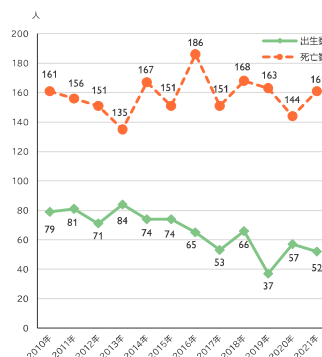
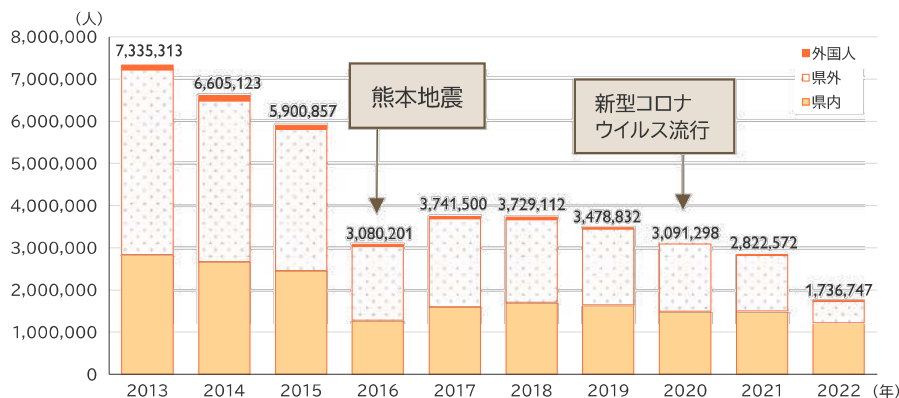


図1-7 出生数・死亡数の推移

(2) 観光

南阿蘇村には、自然景観や水源など多くの観光資源があり、それらを生かした施設なども多く、熊本県内でも観光客の多い地域です。しかし、熊本地震を機に、県内外の観光客は大幅に減少しており、近年では新型コロナウイルス感染症の流行により海外や県外からの観光客が減少傾向にあります。



	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
県内容	2,838,260	2,677,182	2,457,452	1,284,455	1,599,070
県外客	4,374,292	3,805,153	3,346,999	1,743,288	2,088,658
外国人	122,761	122,788	96,406	52,458	53,772
	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
県内容	1,711,455	1,644,925	1,496,831	1,502,231	1,225,503
県外客	1,957,377	1,799,003	1,594,467	1,319,722	509,204
外国人	60,279	34,904	—	619	2,040

図 1-8 観光客数の推移

(3) 交通

道路交通網は、主要道路である国道 325 号が東西を貫き、西は新阿蘇大橋を経て阿蘇市や大津町へ、東は高森町へとつながっています。平成 28 年(2016 年)4 月に発生した熊本地震により落橋した阿蘇大橋は、元の場所から 600m 下流に新たに架橋され令和 3 年(2021 年)3 月 7 日に開通しました。また、村の南側を東西に伸びる県道 28 号は、西は俵山トンネルを抜けて西原村へ、東は高森町へとつながっています。

鉄道は、南阿蘇鉄道が村内の中心を東西に貫いて走っています。南阿蘇鉄道も熊本地震で大きな被害を受け平成 28 年(2016 年)7 月からは中松－高森間のみで運行されてきましたが、令和 5 年(2023 年)7 月に不通となっていた立野－中松間の運行を全線復旧し再開しました。地域の日常生活の主要な交通機関としてだけでなく、観光路線としてトロック列車を運行するなど、地域の活性化に寄与しています。

バスは、村内周辺ではコミュニティバスの「南阿蘇ゆるっとバス」が白水コース（立野駅⇨高森中央、旧国道 325 号）と、久木野コース（南阿蘇村役場⇨高森中央、県道 28 号）の 2 経路で運行しています。また、村外へのバスは、快速「たかもり号」（熊本市内⇨高森町）が中松や白川水源を經由しており、特急「たかちほ号」（熊本市内⇨高千穂・延岡）が久木野を經由し運行しています。

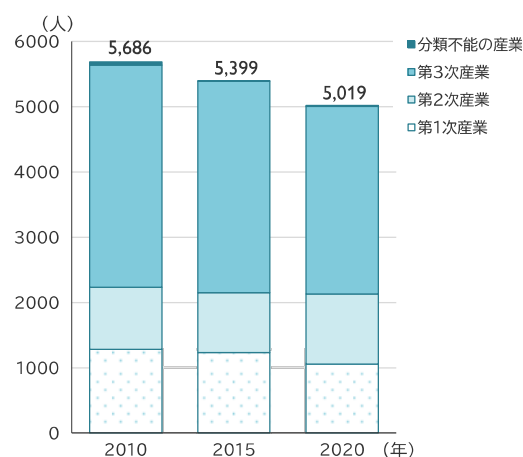
(4) 産業

南阿蘇村の産業を就業者数から見ると、令和2年(2020年)において第1次産業が1,056人、第2次産業が1,075人、第3次産業が2,872人となっており、第3次産業が全体の57%を占めています。就業者数の推移(平成22年(2010年)~令和2年(2020年))を見ると、就業者数は減少傾向となっています。産業別に見ると第2次産業が増加傾向にありますが、第1次産業の就業者は減少しており文化的景観(田園景観、森林景観)などの維持、継承が難しくなっていくことが懸念されます。また、第3次産業の中では、宿泊業・飲食サービス業や卸売業・小売業が中心となっていますが、少子高齢化による担い手不足など、課題点も多いと考えられます。

第2次南阿蘇村総合計画【改訂版】後期基本計画(令和4年度(2022年度)~令和7年度(2025年度))では、農業公社の活用や鳥獣害対策による耕作放棄地の減少とともに、森林経営管理制度を活用した林業経営の安定化に取り組むほか、農商工連携による地域ブランド商品の拡大や観光客を意識した商業振興を推進することなどを目指しています。

表1-5 令和2年(2020年)国勢調査 就業状態等基本集計

区分		総数	男性	女性
第1次産業	農業	1,028	600	428
	林業	24	17	7
	漁業	4	3	1
第2次産業	鉱業、採石業、砂利採取業	-	-	-
	建設業	572	492	80
第3次産業	製造業	503	334	169
	電気・ガス・熱供給・水道業	10	8	2
	情報通信業	29	22	7
	運輸業、郵便業	143	128	15
	卸売業、小売業	489	222	267
	金融業、保険業	28	8	20
	不動産業、物品賃貸業	40	21	19
	学術研究、専門・技術サービス業	85	58	27
	宿泊業、飲食サービス業	488	190	298
	生活関連サービス業、娯楽業	204	86	118
	教育、学習支援業	148	66	82
	医療、福祉	696	171	525
	複合サービス事業	88	50	38
	サービス業(他に分類されないもの)	206	137	69
	公務(他に分類されるものを除く)	218	158	60
分類不能の産業	16	9	7	
総計		5,019	2,780	2,239



	2010年	2015年	2020年
第1次産業	1,279	1,232	1,056
第2次産業	951	916	1,075
第3次産業	3,409	3,244	2,872
分類不能の産業	47	7	16
総計	5,686	5,399	5,019

(5) 文化財関係施設

1) 南阿蘇村歴史民俗資料館

南阿蘇村歴史民俗資料館(以下、「資料館」という)は立野ダム関係の補助事業を活用し昭和60年(1985年)に建設しました。展示室が2室あり、ホール左の展示室には昭和56年(1981年)に長陽中学校のPTAが集めた大正から昭和にかけて使われていた民具と、令和元年(2019年)に久木野民俗資料館から移した久木野地域の民具も展示されています。

また、ホール右の展示室には長陽地域で採集された土器・石器をはじめ、陽の丘遺跡ひのおかいせきや南鶴遺跡みなみつるいせきから出土した土器が展示してあります。また、文化12年(1815年)に発生した火山性爆発である「湯の谷大変」の資料や甲斐有雄の道しるべの実物や拓本、県指定重要文化財「西野宮神社の梵鐘」も保管・展示されています。



図 1-9 南阿蘇村歴史民俗資料館



図 1-10 南阿蘇村歴史民俗資料館 (民俗資料室)

2) 熊本地震震災ミュージアム KIOKU (熊本県観光文化政策課所管)

熊本地震震災ミュージアム KIOKU は、平成 28 年(2016 年)に発生した熊本地震の記憶や経験・得られた教訓を後世に伝える回廊型のフィールドミュージアム

「熊本地震 記憶の廻廊」の中核拠点として熊本県が整備し、令和 5 年(2023 年)7 月に開館しました。震災遺物の展示や当時を振り返るシアター、震災遺構、各種プログラムを通じ、熊本地震の被災の様子や、発生のメカニズム、防災について学び、人と自然との共生のあり方について考えることができる施設です。

また、敷地内には被災した旧東海大学阿蘇キャンパスの旧 1 号館を 4 つに分割することで保存し、地震で表出した断層はそのまま保存し、当時の状況を残し、継承しています。



図 1-11 熊本地震震災ミュージアム KIOKU

3) 公益財団法人 阿蘇火山博物館

阿蘇市に所在する自然史博物館で、阿蘇山の成り立ちや火山と共生する生活、自然の中での人々の暮らしに関する内容を中心に展示しています。

阿蘇カルデラ内の文化教育の拠点として阿蘇郡市内の博物館施設等と連携しており、令和 6 年度(2024 年度)からは南阿蘇村と包括連携協定を結び旧立野小学校で資料整理、調査等の研究業務を行っています。



図 1-12 阿蘇火山博物館

3 歴史的背景

(1) 先史

南阿蘇村の地に人々が足を踏み入れたのは、旧石器時代から縄文時代への移行段階と考えられており、それを示す村内最古の遺跡が河陽F遺跡です。この遺跡から旧石器時代の細石器と縄文早期の爪形文土器と一緒に出土しています。

縄文時代は、狩猟と採集を行い生活していたと考えられ、陽の丘遺跡や柏木谷遺跡でこの時代の土器が出土しており、河陽F遺跡の縄文期の地層からは落とし穴とみられる遺構や磨石が出土しており狩猟と採集の痕跡が遺っています。

弥生時代の遺跡には大規模集落跡である幅・津留遺跡や南鶴遺跡があります。これらの遺跡からは石包丁が出土しており稲作が始まったことが考えられます。また、幅・津留遺跡では金属製品が多く出土しているほか、熊本・大分・福岡などの影響を受けた土器が多く出土していることから、それら地域と密接な関係があったことが分かります。また、これらの集落の土壇墓等にはベンガラが使用され、その原料は阿蘇のリモナイトを利用していました。

古墳時代の住居跡や集落跡は見つかっていません。柏木谷遺跡などでは古墳時代前期の円墳と方形周溝墓、中期以降の円形周溝墓と様々な墓が見つかっています。そのほかにも村指定記念物(遺跡)となっている六の石古墳群では古墳時代後期の築造と見られる横穴式石室をもつ古墳が確認されています。



図1-13 幅・津留遺跡(報告書より転載)

このように古墳が見つかることから、本村でも首長的級の権力者がいたことが分かります。

(2) 古代

大化の改新が起こり、中央政権の体制が変わる頃に肥後国が成立しました。肥後国は13の郡(のちに14)に分かれ、現在の南阿蘇村は阿蘇郡に属していました。郡の下に郷が置かれることとなりますが、本村がどこの郷に該当していたかは明瞭ではなく、範囲は知保郷と衣尻郷のどちらか、または両方に属していたものと推定されています。

阿蘇山では7世紀にはすでに山上での祭祀が行われており、山上の古坊中と呼ばれる山岳宗教施設には、最盛期には坊舎37、庵52があったと記録されています。古坊中の成立には神亀3年(726年)に最栄読師が阿蘇山上で十一面観世音菩薩を刻んで成立したとする説と天養元年(1144年)に阿蘇大宮司の許しを得た最栄読師が阿蘇山に住む際に成立したとする2つの説があります。この古坊中は中世末期に荒廃し、肥後に入国した加藤清正により現在の麓坊中(阿蘇市)に再興されました。

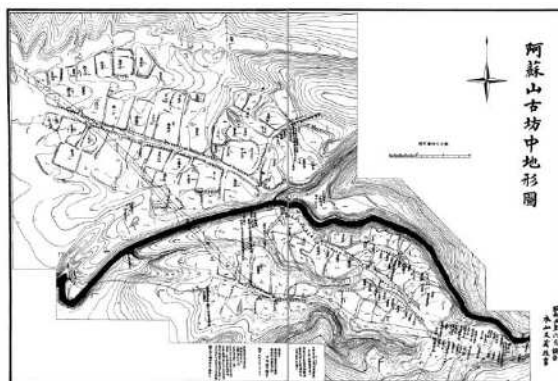


図1-14 古坊中古地図(報告書より転載、一部加工)

(3) 中世

中世に阿蘇大宮司家が南郷谷に拠点移したことが熊本県教育委員会により調査された二本木前遺跡と祇園遺跡という2か所の館跡により推定されています。平安時代に建設された館跡が二本木遺跡、鎌倉時代の館跡が祇園遺跡です。最終的に13世紀初めから中頃までに二本木前遺跡は館としての役割は失い、祇園遺跡に機能が移転します。その二本木前遺跡がある場所には、14世紀中頃に光照寺が建立されています。

南北朝時代に阿蘇大宮司家で騒乱が起こり、朝廷が南北朝に分裂したのと同じく、南郷城を拠点とする南朝側と矢部を拠点とする北朝側に分裂しました。この後、南朝側と北朝側は数度の戦いを繰り返し、南郷城では興国元年(1340年)に戦いで多くの戦死者が出たとされています。阿蘇大宮司家の統一に向けては、宝徳3年(1451年)に南朝側の惟歳が北朝側の惟忠の養子になることなどが図られましたが、惟忠が惟歳に家督を譲らなかったことにより両家の対立は続き、最終的に阿蘇家が統一されたのは文明17年(1485年)のことでした。

安土桃山時代の阿蘇は豊後の大友氏の勢力下にありましたが、天正13年(1585年)から行われた薩摩の島津氏による阿蘇攻めにより、高森城では3回に渡り戦場となりました。この戦いの中で村内にあった中世城郭である長野城、下田城、駒返城などが攻め落とされ、寺院などにおいても天徳寺という寺院が兵火により焼失したと伝えられています。



図1-15 二本木前遺跡出土木簡

(報告書より転載)

(4) 近世

肥後における近世の行政体系として独特なものとして手永制度があります。手永とは郡と村の間にあたる行政組織で南阿蘇村は高森手永と布田手永の範囲でした。高森手永の会所は、当初高森(現:高森町)に置かれていましたが、正徳年間(1711年~1716年)に吉田新町(現:南阿蘇村)へ移されました。明治17年(1884

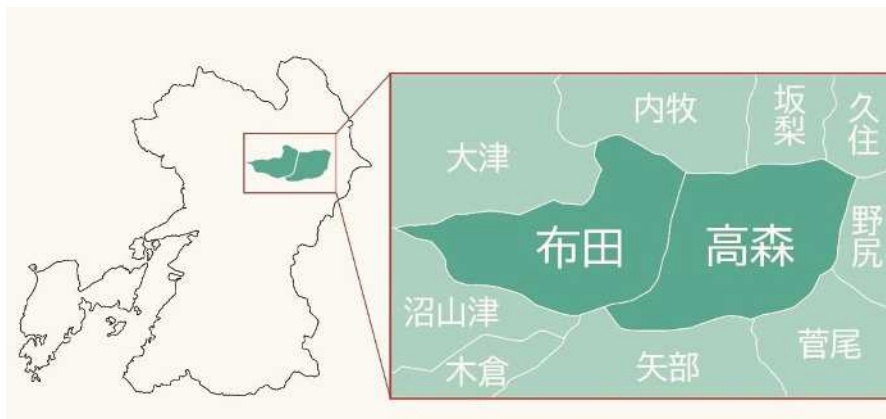


図1-16 南阿蘇村の手永

年)に地元区長から熊本県令へ出された記録では吉田新町に多くの商家が見られ商業の中心地であったことが確認できます。この吉田新町では21軒を巻き込む火災が宝暦9年(1759年)に起こるなどたびたび火災が発生しました。高森手永の手永会所も天明5年(1784年)に火災により焼失し、翌年に再建されました。吉田新町では「山曳き」と呼ばれる祭りがあり、現在は火伏地蔵を祀る鎮火祭となっていることから火災に対する住民の危機意識が見て取れます。

近世の南郷谷に大きな影響を与えた人物として片山嘉左衛門（松翁）がいます。南郷谷は元々平坦地が少なく火山性土壌であるため保水力が弱く河川や遊水池付近以外は水に乏しい地域であったので、農家の多くは少ない水田と畑作で生計を立てていました。そのような中で全国的に新田開発が盛んとなり、南郷谷でも肥後藩より松翁が寛文7年(1667年)に南郷中用水方定役に任じられました。松翁は斤量式測定法と呼ばれる測量法を考案し、白水から久木野にかけて伸びる「保木下井手」を開削し、その技術は久木野を中心に継承され多くの水路が続けて開発されました。



図 1-17 保木下井手

18世紀の阿蘇郡では、阿蘇中岳の活性化や熊本藩領全体における飢饉が起こっており、食料面において大変厳しい状況でした。松翁の功績が南郷谷の人々の暮らしを支えたことは言うまでもありません。

江戸時代においては、田畑を耕すために利用される牛馬が飼育されており、草原で放牧が行なわれていました。高森手永では草原の火入れのため、輪地と呼ばれる防火帯の管理をする職務である「輪地見締」が置かれていたことが分かっており、現在と同じように地元と行政が連携して牧野の火入れの維持管理に関わっていました。この草原は、「阿蘇の文化的景観 阿蘇山南西部の草原及び森林景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

(5) 近現代

明治4年(1871年)の廃藩置県で熊本藩が熊本県に変わり、同時に江戸時代に置かれていた手永・庄屋の制度が廃止され郷組制が開始されて、高森手永は高森郷、布田手永は布田郷と改められました。

また、阿蘇郡の多くの村が明治9年(1876年)に合併を行い、10村ほどの村にまとまります。さらに明治21年(1888年)の市制・町村制が公布されると明治22年(1889年)に長陽村、久木野村、白水村の3村が誕生しました。

明治10年(1877年)に西南戦争が起こり政府軍と薩軍が戦いました。熊本では熊本城や田原坂などが激戦の舞台となり、南郷谷でも政府軍と薩軍が衝突しました。薩軍は、二重峠(阿蘇市)を陣として黒川に小隊を配置しました。一方政府軍は、吉田新町に警視隊を配置しました。3月18日に黒川の「高野原」と呼ばれる原野で衝突が起こりました。結果としては薩軍が有利に展開し、政府軍所属の警視隊小隊長であった元会津藩家老の「鬼官兵衛」こと佐川官兵衛も戦死しました。



図 1-18 佐川官兵衛肖像画像

明治時代の中・後期には清やロシアに対して戦争が起こります。日露戦争時には南阿蘇からも多くの村民が出兵しており、市下神社や八坂神社に石碑が建てられています。

大正時代には日本の近代化が加速し、大正6年(1917年)に熊本一宮地間を結ぶ鉄道である宮地線が開通しました。その動きに触発され南郷谷でも鉄道敷設の動きが加速し、大正9年(1920年)に南郷谷の7市町村で国への要望が行われました。その後、昭和3年(1928年)に高森線が開通し、産業と観光が発展に寄与しました。

しかし、太平洋戦争中の昭和 20 年(1945 年)に、高森線の中松駅でグラマン機の機関銃掃射による銃撃が起きました。現在も中松駅のホーム下部には、弾痕が残っています。

戦後の南阿蘇村での大きな出来事として、立野地域の編入合併と 6.26 水害を挙げることができます。

昭和 28 年(1953 年)10 月の町村合併促進法の施行により、全国で合併の機運が高まりました。白水村と久木野村ではこの合併時に大きな動きはありませんでしたが、長陽村がこの合併に関わることとなりました。その理由として瀬田村(現：大津町)で大津町との合併の動きが起きましたが、現在の立野地区は地形上阿蘇郡の地域にあることなどの理由から、瀬田村で反対運動が起きました。結果として昭和 31 年(1956 年)に立野地区が瀬田村から分村し、長陽村へ編入合併することとなりました。

「6.26 水害」は昭和 28 年(1953 年)に起きた大きな災害です。この水害は、白川水系にある多くの市町村に大きな被害をもたらしました。この年は降水量が多い年であり、6 月上旬から長く雨が降り続いていました。この雨は 26 日に特に強まり、当時の降水量の総量は 5 日間で 900 ミリを超え氾濫することとなりました。村内でも、白川沿岸の集落に多くの慰霊碑が建てられています。



図 1-19 中松駅弾痕



図 1-20 6.26 水害(白水村 思い出写真集より転載)

(6) 現代

南阿蘇村の成立は、平成 12 年(2000 年)熊本県の市町村合併推進本部設立が契機となります。この年、県阿蘇地域振興局に市町村合併阿蘇地域推進本部が設立され、阿蘇地域の各市町村へ合併検討会の設立を打診しました。この打診は一度見送られましたが、平成 13 年(2001 年)に 6 市町村で「阿蘇地域町村合併検討会」が発足しました。この検討会を基礎として様々な合併案が検討され、最終的に平成 14 年(2002 年)白水村・久木野村・長陽村の 3 村での合併が合意されました。平成 15 年(2003)の協議会で名称についての協議が行われ候補として「阿蘇白川村」、「阿蘇南郷村」、「大阿蘇村」、「南阿蘇村」が挙げられた後、最終的には正式に南阿蘇村という名前に決まり、平成 17 年(2005 年)に本村が誕生しました。

その後に本村が直面した大きな危機として、熊本地震があります。平成 28 年(2016 年)4 月 14 日に大規模な前震が発生し、4 月 16 日の深夜に河陽地区では震度 6 強を計測する最大規模の地震に見舞われました。この地震により人命を含む甚大な被害が発生し、文化財においても指定・未指定を問わず多くの文化財が被災しました。



図 1-21 熊本地震で崩壊した旧阿蘇大橋